

# 容姿と社会的不平等

## —キャリア形成、家族形成、心理にどう影響するのか—

小林盾、谷本奈穂

### 【要約】

この論文では、人びとの容姿がキャリア形成、家族形成、心理にどう影響するのかを分析することで、社会的不平等における容姿（ルックス、身体的魅力）の役割を解明する。そこで、人びとは美容資本に時間や労力を人的資本として自分に投資し、地位達成の向上などで回収すると仮定した。

エビデンスとして、ランダムサンプリング調査を実施してデータ収集した（有効回収数 297 人、有効回収率 60.9%）。20 歳時の容姿（とくに顔）について、1 下から 10 上の 10 段階で、主観的評価を測定した。

分析の結果、以下が分かった。（1）容姿の分布は、男女ともにランク 5 と 7～8 の二山をもった。男女で分布に違いはなかった。（2）容姿の規定要因では、性別による違いはなかった。（3）容姿の帰結では、容姿がよいと、役職につきやすく、所得が増えた（所得は男性のみ）。多くの人から告白され、交際人数や結婚のチャンスや子どもの数が増えた。さらに、高い階層にいると感じ、自信があり、幸福だった（幸福は男性のみ）。（4）このように、男性ほど容姿の影響が強かった。これは、男性のほうが美容資本への投資が不均等なため、容姿が社会的不平等につながりやすいからかもしれない。

以上から、容姿はライフチャンスを拡大させたり制約しうる。この点で、容姿は社会的不平等の一要因といえよう。

### 【キーワード】

容姿、社会的不平等、キャリア形成、家族形成、心理、人的資本

## 1 イントロダクション

### 1.1 パズル

労働力調査によれば、日本社会では戦後いっかんして、ホワイトカラー労働者（専門・管理・事務・販売職）の比率が上昇してきた。すべての労働者のうち、1953 年に 28.4% だったのが、2010

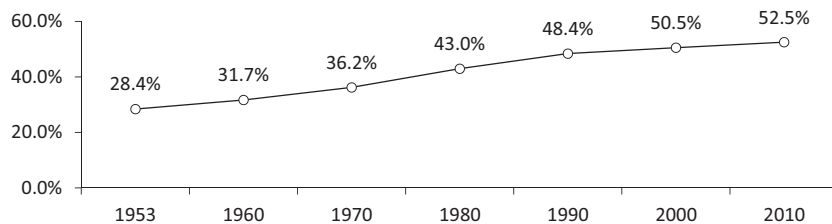


図1 ホワイトカラー労働者の比率の推移

(注) 1) 出典：労働力調査。

2) 全労働者のうち、専門・管理・事務・販売職の合計の比率。

年に52.5%となった(図1)。

ホワイトカラー労働者の増加は、どのような変化をもたらすのだろうか。ブルーカラー労働は、農作物、建築物、工業製品のような「物」を対象とし、なにかを作りだすことが中心である。それにたいし、ホワイトカラー労働は、他人に指示したり、物を売ったりと「人」を対象とし、他人とコミュニケーションをとることが中心となる。

したがって、ホワイトカラー労働者が増えた現代社会では、対人魅力が重要となるはずである。とくに、容姿(ルックス、身体的魅力、外見、美貌、美容)がよい人ほど、コミュニケーションの際好意的に受け取られる可能性がある。そうだとすれば、そうした人ほどライフチャンス(人生選択の可能性)が拡大し、その結果よい働き方をしているかもしれない。さらに、容姿が違うと、恋愛、結婚、出産といった家族形成のチャンスが異なったり、(満足度や幸福感などで)異なる心理をもつ可能性もある。

## 1.2 先行研究

では、容姿はどのように測定でき、社会的不平等にたいしどのような役割を果たすのだろうか。Hamermesh(2011)の整理によれば、これまで多くの研究で全身や服装より「顔」が重視され、5段階または10段階で、その人の容姿を他者が評価してきた(出発点はCampbell et al. 1971のQuality of American Life調査における5段階)。その結果、容姿の評価はおおむね評価者のあいだで一致し、容姿がよい人のほうがそうでない人より多かった。男女で平均は変わらないが、女性のほうが散らばりが大きい(Hatfield and Sprecher 1986)。年齢別では、若い人のほうがよいと評価された。

キャリア形成のうち所得について北米社会では、容姿がよい人ほど所得が多く、美さへのプレミアムより平凡さへのペナルティのほうが大きい。効果は男性のほうが強い(Hamermesh and Biddle 1994)。これらは自信、性格、身長、体重とは別の効果をもった。

家族形成については、結婚のチャンスに違いはなかった(ただし容姿のよい女性は、教育の高い男性と結婚していた)。心理については、容姿がよい人ほど満足や幸福を感じやすかった(Umberson and Hughes 1987)。

### 1.3 リサーチ・クエスチョン

このように、キャリア形成、家族形成、心理への容姿の効果がそれぞれ蓄積されてきた。しかし、別々のデータで分析されたため、容姿の役割の全体像が未解明となっていた。

そこで、この論文では1つのデータを使用して、つぎのリサーチ・クエスチョンを検討する。もしこの問題が未解決のままだと、ともすればライフチャンスの格差が見すごされて、社会的不平等の拡大と再生産が気付かないうちに進行してしまうかもしれない。

**リサーチ・クエスチョン：人びとの容姿は、ライフチャンスをとおして、キャリア形成、家族形成、心理にどのように影響するのか。**

### 1.4 仮説

この論文では、合理的選択理論を用いて仮説をたてる。ベッカーは、人びとが(時間や労力といった)資源を(教育や健康といった)自分の人的資本に投資し、その投資を職業や収入などの地位達成として回収すると想定した(Becker 1964)。

谷本(2015)は、美容医療や美容整形で身体を美化することを、「外見資本」への投資と捉える。外見資本は、人的資本の一種といえるだろう。そこで、この論文では「美容資本」beauty capital とよび、つぎの仮定をおく(図2)。

**仮定(美容資本への投資と回収)：人びとは時間や労力を投資して、人的資本としての美容資本を蓄積し、キャリア形成、家族形成、心理などの向上として回収する。**



図2 仮定(美容資本に投資し回収する)

### 1.5 仮説

では、容姿は、どのように決まるのだろうか。谷本(2015)によれば、男性とくらべ女性ほど、若い人ほど、教育が中程度(短大・専門学校卒でピーク)ほど、美容資本への投資が盛んだった。短大卒を大卒・大学院卒とまとめるなら、教育が高いほど投資するだろう。ここから、容姿の規定要因について、つぎの仮説がたてられる。

**仮説1(容姿の規定要因)：女性ほど、若い人ほど、教育が高い人ほど、美容資本に投資するため、容姿がよいだろう。**

それでは、容姿は、その後のライフスタイルにどう影響するのだろうか。容姿がよい人ほど、ライフチャンスが広がるなら、キャリア形成、家族形成、心理面でよいパフォーマンスをえるだろう

(仮説2)。2つの仮説をまとめると、図3となる。

**仮説2 (容姿の帰結)：**容姿がよい人ほど、ライフチャンスが拡大するため、キャリア形成、家族形成、心理が促進されることで、美容資本への投資が回収されるだろう。

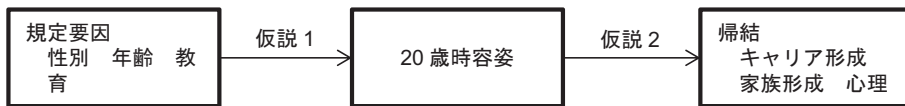


図3 仮説で想定するメカニズム

さらに、もし仮説1が正しいなら、女性ほど美容資本からの回収の効率がよいと予想できる(仮説3)。

**仮説3 (容姿の影響の男女差)：**女性ほど美容資本からの回収効率がよいため、容姿の影響は、女性ほど大きいだろう。

## 2 方法

### 2.1 データ

データは、「2015年暮らしについての西東京市民調査」を用いた(2015年6～9月、成蹊大学社会調査士課程実施、小林盾代表)。ランダムサンプリングにもとづく郵送調査である(調査の詳細は小林・川端編 2016)。母集団は東京都西東京市在住の22～69歳個人約12万人であり、計画標本サイズは500人だった(二段確率比例抽出法)。有効標本サイズは488人、有効回収数は297人、有効回収率は60.9%である。

以下の分析では、容姿に回答した276人を対象とする。男性48.2%、平均年齢47.8歳、平均教育年数14.4年、現在結婚69.9%/離死別6.9%/未婚23.2%であった(詳細な記述統計は表1)。

### 2.2 容姿の測定：主観的容姿評価

容姿は、とくに「顔」に着目したうえで、以下のように主観的評価を20歳時と現在について、1下～10上の10点(10ランク)で質問した。いわば人びとの心のなかに、容姿についての引き出しが上から下まで10段並んでいると想定している(「心の引き出し」という概念は小林 2012より)。

問 かりに現在の日本社会が、ルックス（顔）で上から下まで次のようなグループに分かれるとすれば、人びとは以下の方をどれに入れますか（○はそれぞれ1つ）

	下										上
20歳時のあなた	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
現在のあなた	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	

先行研究では容姿は、他者による客観的評価で測定されることが多かった。この調査では、より多くの変数をどうじにデータ収集するために、このような自己評価とした。分析では、キャリア形成などの独立変数として扱うため、それに時間的に先行する20歳時容姿をおもに使用する。他にこのバッテリーで「中学卒業後、最初の恋人」「現在の配偶者」についても質問したが、この論文では扱わない。

事前にパイロット調査で主観的容姿評価を、5点、10点、11点で質問し、他者からの評価の平均と比較した。その結果、10点尺度がもっとも自己評価と他者評価の相関が高かった。なお、20歳の大学生に自分の容姿を評価してもらったら、図4となった（本人の許可を得て写真と評価を掲載）。



図4 主観的容姿評価の例（左の自己評価は6、右8）

## 2.3 独立変数

性別は「男性ダミー」（男性なら1、女性なら0）、年齢は2015年12月31日時点の満年齢、教育は「教育年数」（中卒なら9、高卒なら12、短大卒なら14、大卒なら16、大学院卒なら18）とした。

## 2.4 従属変数

### （1）キャリア形成

仮説2の従属変数のうち、キャリア形成の指標として、「有職ダミー」（現在有職なら1、そうでないなら0）、「正規ダミー」（正社員、正規公務員なら1、それ以外なら0）、「ホワイトカラーダミー」（専門・管理・事務・販売職なら1、それ以外なら0）、「規模300人以上ダミー」（従業先規模が支社含め300人以上なら1、そうでないなら0）、「役職ダミー」（課長相当以上なら1、それ

以外は0)、「等価所得」(単位は百万円)を用いる。

## (2) 家族形成

家族形成の指標として、「告白した人数」「告白された人数」「交際人数」「結婚人数」「子ども数」を、以下のように質問した。すでに過去の調査から(小林 2014)、これらが8人以上となるのは10%以下であることから、最大8人とした。交際人数は平均2.7人であり、内閣府(2011)の2.9人、小林(2014)の3.3人とおおきく異なることはなかった。

問 あなたには、以下の人が何人いますか(○はそれぞれ1つ)

子供が～人いる(別居含む)	0	1	2	3	4	5	6	7	8以上
これまで～人と結婚した	0	1	2	3	4	5	6	7	8以上
中学卒業から最初の結婚まで、～人に告白した(配偶者含む)	0	1	2	3	4	5	6	7	8以上
中学卒業から最初の結婚まで、～人から告白された(配偶者含む)	0	1	2	3	4	5	6	7	8以上
中学卒業から最初の結婚まで、～人と恋人として交際した(配偶者含む)	0	1	2	3	4	5	6	7	8以上

## (3) 心理

代表的な心理として、「階層帰属意識」を1下～10上の10点で、「生活満足度」(以下では満足度とよぶ)を1不満～10満足の10点で、「主観的幸福感」(以下では幸福感とよぶ)を1不幸～10幸福の10点で、「自信」を自分に自信があるかに1当てはまらない～10当てはまるの10点で、それぞれ質問した。

容姿と各従属変数についての記述統計は、表1にある。男女で平均を比較すると、男性ほど有職者、正規雇用者、役職者が有意に多く、告白経験も有意に多い。これにたいし、女性ほど、告白された経験が有意に多く、満足度、幸福感が有意に高い。これらは、一般的な傾向と一致している。

表1 変数の記述統計と男女比較 (全体 N=276、男性 133、女性 143)

	値	最小	最大	平均	標準偏差	男性における平均	女性における平均	男女差の検定
容姿								
20歳時容姿	1下～10上	1	10	5.8	1.8	5.7	6.0	
現在容姿	1下～10上	1	10	5.0	1.5	5.0	5.1	
キャリア形成								
有職ダミー	0、1	0	1	81.2%	.392	89.5%	73.4%	***
正規ダミー	0、1	0	1	41.7%	.494	56.4%	28.8%	***
ホワイトカラーダミー	0、1	0	1	69.2%	.462	71.4%	67.1%	
規模300人以上ダミー	0、1	0	1	26.1%	.440	26.3%	25.9%	
役職ダミー	0、1	0	1	21.4%	.411	38.3%	5.6%	***
等価所得(百万円)	0～16	0.0	15.0	4.6	2.4	4.6	4.6	
家族形成								
告白した人数	0～8	0	8	1.6	1.7	2.2	1.1	***
告白された人数	0～8	0	8	3.1	2.5	2.2	4.0	***
交際人数	0～8	0	8	2.7	1.9	2.8	2.7	
結婚人数	0～8	0	2	0.8	0.5	0.8	0.9	*
子ども数	0～8	0	6	1.2	1.1	1.1	1.3	
心理								
階層帰属意識	1下～10上	1	9	5.5	1.5	5.3	5.6	
満足度	1不満～10満足	1	10	6.5	2.0	6.2	6.9	**
幸福感	1不幸～10幸福	1	10	7.0	1.8	6.6	7.3	**
自信	1当てはまらない～10当てはまる	1	10	5.1	2.1	5.4	4.8	*

(注) 検定はダミー変数の場合カイ二乗検定で、それ以外は分散分析で \* $p<.05$ ; \*\* $.01$ ; \*\*\* $.001$ 。

### 3 結果

#### 3.1 分布

20歳時容姿と現在容姿は、どのような分布をもつのだろうか。図5となった。ランク5～7を中心におおむね一山または二山だった。全体の下半分(ランク1～5の合計)は、20歳時で48.6%、現在で71.0%いた。

(表1より)20歳時と現在を比較すると、全体でも男女別でも、平均して0.7～0.9現在のほうが低かった。男女を比較すると、女性のほうが20歳時で平均0.3、現在で0.1高かった。

これらの分布に、違いはあるのだろうか。20歳時と現在では、全体でも男女別でも、カイ二乗検定の結果分布が有意に異なっていた(すべて0.1%水準)。ただし、男女それぞれでは、20歳時容姿と現在容姿に、カイ二乗検定で有意な差はなかった。

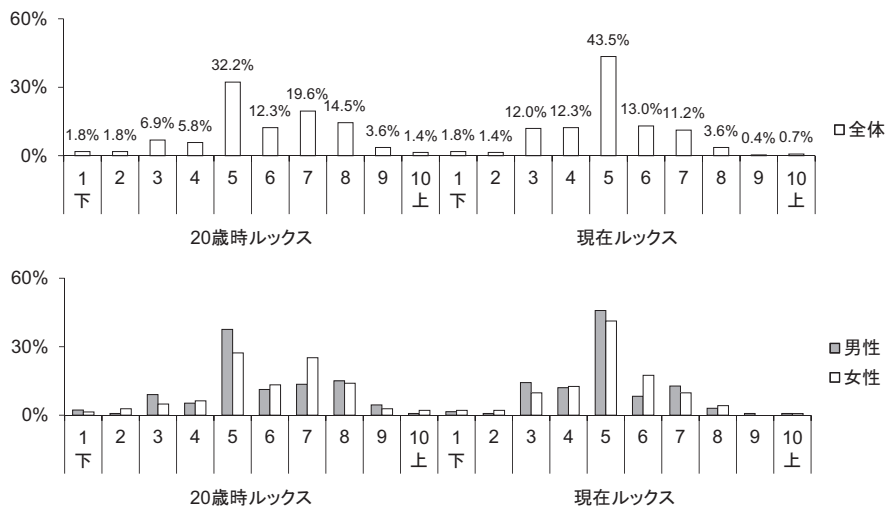


図5 全体と男女別、20歳時容姿と現在容姿の分布 (N=276)

なお、20歳時容姿と現在容姿でクロス表をつくると、20歳時から現在にかけて容姿が上昇した人、同じだった人、下降した人は、全体のうちそれぞれ10.1%、42.8%、47.1%と、下降したと感じる人が多かった。男性のうちでは、それぞれ9.0%、52.6%、38.3%、女性のうちでは11.2%、33.6%、55.2%だった。20歳時のボディマス指数 (BMI、肥満度を表す、体重÷身長<sup>2</sup>で計算) と関連を調べたら、相関係数 - 0.262 で有意な負の関連があった (0.1%水準)。

### 3.2 容姿の規定要因 (仮説1)

では、容姿の規定要因はなにだろうか。仮説1を検証するために、性別、年齢、教育が20歳時容姿に影響するのかを分析した。そこで、従属変数を従属変数とした単回帰分析をおこなった (結果は表2)。

その結果、男女では差がなかった。しかし、年配者ほど有意に容姿がよかった (5%水準)。男女別でも同様の関連があった (グループ別平均は図6)。教育との関連は、男性のみであり、教育が高いほど容姿が低下した (5%水準)。女性では差がなかった。

表2 20歳時容姿を従属変数とした単回帰分析結果 (全体 N=276、男性 133、女性 143)

	全体	男性	女性
男性	- 0.27		
年齢	0.03 **	0.03 *	0.02 *
教育年数	- 0.06	- 0.16 *	0.05

(注) \*p<.05 ; \*\*.01。



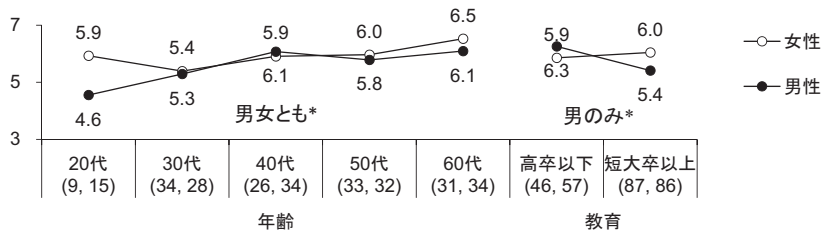


図6 年齢と教育別、男女別、20歳時容姿の平均 (N=276)

(注) 1) 括弧内は左男性度数、右女性度数。

2) 回帰分析で \* $p < .05$ 。

以上から、仮説1は支持されなかった。男女で差がなく、年齢ではむしろ年輩者のほうが容姿が上昇した。主観的評価のため、懐古期間が長くなるほど「昔はよかった」と美化したのかもしれない。教育は、男性のみに効果をもった。男性では、十分な教育達成ができなかった人が、挽回するために美容資本に、いわば「不均等に」投資するのかもしれない。いっぽう女性は、教育にかかわらず、いわば「均等に」美容資本に投資するようである。そのため、美容資本への投資は、男性において違いがあるといえる。

なお、20歳時容姿を従属変数とし、性別、年齢、教育年数を独立変数とした重回帰分析をおこなった。その結果、全体では年齢のみが有意な正の効果をもった。男女別では、男性で年齢(正)と教育(負)が、女性で年齢のみ(正)が効果をもった。つまり、独立変数を統制しても、個々の独立変数の効果は同じだった。

### 3.3 容姿の帰結 (仮説2)

それでは、容姿はどのような帰結をうむのだろうか。仮説2を検証するために、キャリア形成、家族形成、心理への影響を調べた。独立変数が(20歳時容姿という)連続変数なので、従属変数が連続変数の場合は線型回帰分析を、ダミーの場合はロジスティック回帰分析をおこなった。

ここでは直接の効果をみるため、他の変数で統制していない(あとで年齢、教育年数で統制する)。結果が表3である。また、20歳時容姿別に、代表的な変数の平均・比率を図7で比較した(20歳時容姿1~3を3以下、8~10を8以上へとまとめた)。すべての従属変数についての平均・比率の比較結果は、表4にある。

表3 20歳時容姿を独立変数とした単回帰分析、ロジスティック回帰分析結果  
(全体 N=276、男性 133、女性 143)

従属変数	分析	全体	男性	女性
<b>キャリア形成</b>				
有職ダミー	ロジスティック回帰	0.98	1.05	0.98
正規ダミー	ロジスティック回帰	1.01	1.11	0.96
ホワイトカラーダミー	ロジスティック回帰	1.03	0.98	1.09
規模300人以上ダミー	ロジスティック回帰	0.97	1.05	0.89
役職ダミー	ロジスティック回帰	1.29 **	1.40 **	1.65 *
等価所得(百万円)	線型回帰	0.26 **	0.35 **	0.18
<b>家族形成</b>				
告白した人数	線型回帰	0.08	0.13	0.06
告白された人数	線型回帰	0.48 ***	0.37 ***	0.53 ***
交際人数	線型回帰	0.28 ***	0.32 ***	0.24 **
結婚人数	線型回帰	0.06 **	0.06 *	0.04 *
子ども数	線型回帰	0.12 **	0.14 **	0.10 †
<b>心理</b>				
階層帰属意識	線型回帰	0.27 ***	0.34 ***	0.19 **
満足度	線型回帰	0.04	0.10	-0.03
幸福感	線型回帰	0.11 †	0.21 *	0.00
自信	線型回帰	0.45 ***	0.53 ***	0.40 ***

(注) 1) 値は連続変数の場合非標準化係数、ダミー変数の場合オッズ比(たとえば役職ダミーの全体が1.29なので、20歳時容姿が1ランク上がると役職に1.29倍つきやすくなる)。

2) † $p<.10$ ; \* $.05$ ; \*\* $.01$ ; \*\*\* $.001$ 。

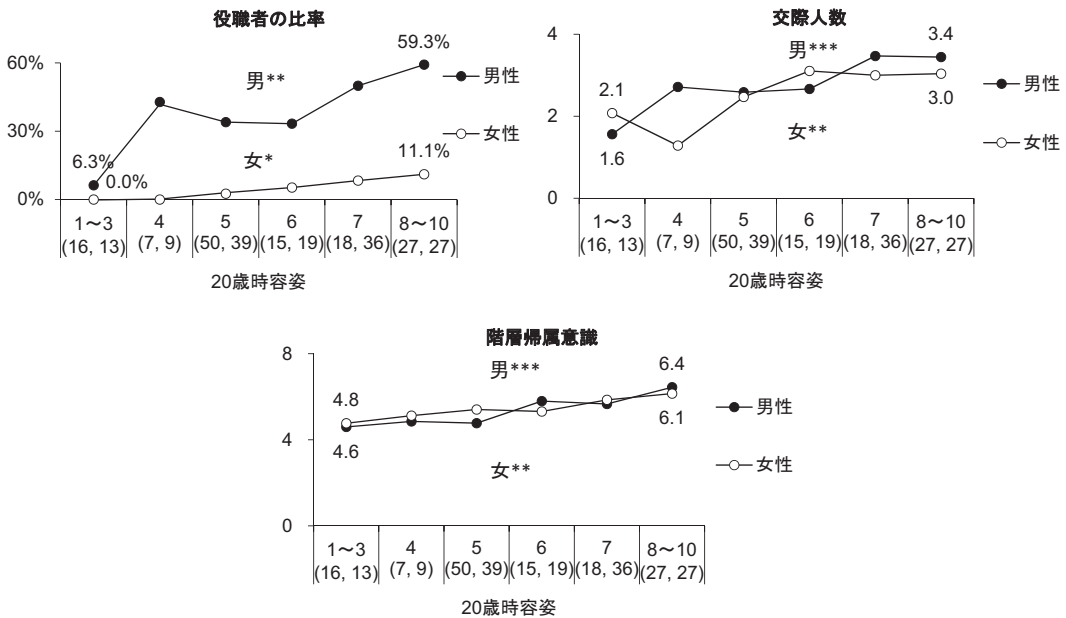


図7 20歳時容姿別、男女別、役職者、交際人数、階層帰属意識の平均・比率 (N=276)

(注) 1) 括弧内は左男性度数、右女性度数。

2) 回帰分析またはロジスティック回帰分析で \* $p<.05$ ; \*\* $.01$ ; \*\*\* $.001$ 。

表 4 20 歳時容姿別の平均・比率の比較結果 (男性 N=133、女性 143)

	男性							女性						
	1~3	4	5	6	7	8~10	分散分析	1~3	4	5	6	7	8~10	分散分析
度数	16	7	50	15	18	27		13	9	39	19	36	27	
キャリア形成														
有職ダミー	81.3%	85.7%	90.0%	93.3%	100.0%	85.2%		76.9%	66.7%	66.7%	89.5%	77.8%	66.7%	
正規ダミー	43.8%	57.1%	50.0%	73.3%	66.7%	59.3%		23.1%	44.4%	20.5%	42.1%	36.1%	14.8%	
ホワイトカラーダミー	68.8%	57.1%	72.0%	80.0%	77.8%	66.7%		61.5%	55.6%	56.4%	89.5%	77.8%	59.3%	†
規模 300 人以上ダミー	25.0%	42.9%	22.0%	26.7%	44.4%	18.5%		46.2%	22.2%	15.4%	42.1%	25.0%	22.2%	
役職ダミー	6.3%	42.9%	34.0%	33.3%	50.0%	59.3%	*	0.0%	0.0%	2.6%	5.3%	8.3%	11.1%	
等価所得 (百万円)	3.1	4.7	3.9	6.2	5.0	5.3	**	3.3	4.0	4.6	4.9	5.1	4.4	
家族形成														
告白した人数	1.4	2.6	2.0	2.7	2.8	2.2		1.1	0.6	0.9	1.5	1.1	1.2	
告白された人数	0.8	1.7	2.0	2.0	2.3	3.4	**	2.2	1.5	3.2	5.4	4.7	4.8	***
交際人数	1.6	2.7	2.6	2.7	3.5	3.4	*	2.1	1.3	2.5	3.1	3.0	3.0	†
結婚人数	0.6	0.7	0.7	0.8	0.7	1.0		0.8	0.4	0.9	0.9	0.9	1.0	*
子ども数	0.6	0.6	1.0	1.5	1.1	1.4		1.0	0.9	1.3	0.9	1.5	1.7	
心理														
階層帰属意識	4.6	4.9	4.8	5.8	5.7	6.4	***	4.8	5.1	5.4	5.3	5.9	6.1	*
満足度	6.9	6.3	5.6	5.9	6.0	7.0	†	6.8	7.3	6.8	7.1	6.8	6.8	
幸福感	6.6	6.7	6.3	5.9	6.8	7.6	*	7.2	7.6	7.1	7.6	7.3	7.2	
自信	3.9	4.7	4.9	5.5	5.9	6.8	***	3.0	4.4	4.5	4.6	5.3	5.6	**

(注) 1) †  $p < .10$ ; \*  $p < .05$ ; \*\*  $p < .01$ ; \*\*\*  $p < .001$ 。

### (1) キャリア形成への影響

20 歳時容姿がよいからといって、現在有職だったり、正規雇用者だったり、ホワイトカラー労働者だったり、従業先規模が大きくなるわけではなかった (全体でも男女別でも)。ただし、役職につく可能性が有意に高まった (全体でも男女別でも)。表 3 のオッズ比より、20 歳時容姿が 10 ランクのうち 1 ランク上がると、男性は 1.4 倍、女性は 1.7 倍課長以上になりやすかった。図 7 より、生の値では、男性で 20 歳時容姿 3 以下のうち役職者が 6.3% なのをたいし、8 以上では 59.3% だった。女性では、0.0% が 11.1% となった。

もう一点、等価所得が全体と男性で有意に上昇した。表 3 の回帰係数より、20 歳時容姿が 1 ランク上がると、男性は 35 万円増えた。

### (2) 家族形成への影響

告白した人数は、20 歳時容姿によって差がなかった。それ以外では、20 歳時容姿がよい人ほど、全体でも男女別でも、告白された人数、交際人数、結婚人数、子ども数のどれもが有意に増えた。たとえば、1 ランク上がると、男性で 0.3 人、女性で 0.2 人多く交際した。図 7 より、男性で 20 歳時容姿 3 以下が 1.6 人と交際したのにたいし、8 以上では 3.4 人だった。女性では、1.6 人から 3.0 人へと増えた。

### (3) 心理への影響

満足度は、20歳時容姿によって差がなかった。それ以外では、20歳時容姿がよい人ほど、全体でも男女別でも、階層帰属意識と自信が有意に高まった。幸福感は、全体と男性で高まった。図7より、階層帰属意識が男性で20歳時容姿3以下の人は10段階で平均4.6なのをたいし、8以上では6.4となった。女性では、4.8から6.1へと増えた。

20歳時容姿の影響を、年齢と教育年数で統制して調べたところ、おおむね同じ結果となった（結婚人数、子ども数にたいしてのみ、男女ともに効果がなくなった）。以上から、仮説2は部分的に支持された。20歳の容姿がよいと、仕事、家族、心理面でライフチャンスが広がるようである（結果をまとめると図8）。

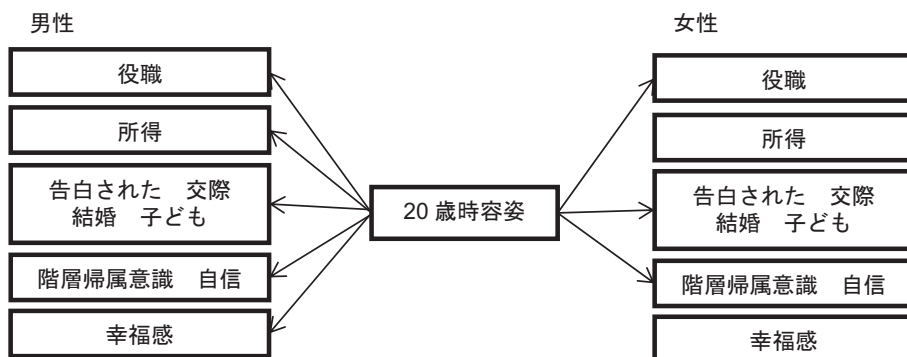


図8 分析結果のまとめ

### 3.4 容姿の影響の男女差（仮説3）

ただし、容姿の影響は男性ほど強かった。女性はだれでも多かれ少なかれ美容資本に投資せざるをえないのにたいし、（仮説1で示唆されたとおり）男性では投資する人が偏っているためかもしれない。そうだとしたら、女性より男性のほうが、美容資本に投資し回収する人が偏っていて、その結果美容資本が社会的不平等につながりやすのかもしれない。

たとえば、この論文と同じデータで、美容資本に現在どのように投資しているかを、6項目で質問した。すると、女性ほど、有意に「ファッション雑誌をよむ」「ヘア・スタイルに気を使う」「メイクを工夫する」「スキン・ケアをする」をおこなっていた（2～4倍多かった）。ただし、「清潔感を維持する」「ダイエットをする」ことに男女差はなかった。

## 4 考察

### 4.1 理念型

分析結果から理念型を考えると、男性では、容姿がよい人はそうでない人と比較して、役職についていたり所得が多くなったりしやすいだろう。これまで告白されたり交際する機会に恵まれ、結婚し

たり子どもがいたりする可能性が高い。自分の所属階層は高いと感じ、幸福で、自信をもっているだろう。

女性でも、ほぼ同様の傾向があるだろう。ただし、所得にとくに差はなく、幸福なわけではない(不幸でもない)。

#### 4.2 先行研究との比較

- (1) 容姿の分布：Hamermesh and Biddle (1994) はアメリカ人とカナダ人を対象に容姿を5点尺度で測定し、(中点をのぞいた) 上半分のほうが、下半分よりいっかんして多かった。この論文では日本人を対象に10点尺度で測定し、20歳時容姿で上半分と下半分がほぼ同じ、現在容姿で下半分が多かった。
- (2) 容姿の規定要因：先行研究ではおおむね男女で平均に差がなく、この論文でも同様だった。年輩の人ほど20歳時容姿がよかったが、これまである時点の容姿がコーホート別に比較されることはなかった。美容整形の実証研究には谷本(2008b)がある。
- (3) 容姿の帰結：先行研究では所得への影響が分析されてきた。この論文では、正規雇用や役職となるチャンス、家族形成、心理への効果について、はじめて分析した。恋愛や結婚のために容姿が重要であることは、これまで指摘されてきた(山田・白河 2008、森川 2007)が、はじめて実証的に解明された。恋愛の社会学的研究には、谷本(2008a)がある。容姿が生活満足度に効果をもたず、主観的幸福感に(男性で)効果があったのは、小林他(2015)の「幸福と満足で規定要因が異なる」という主張と一致する。キャリア形成の規定要因については竹ノ下(2013)が、幸福の規定要因については大竹他編(2010)が、日本社会における心理(社会意識)の変遷については吉川(2014)が詳しい。
- (4) 男女による効果の差：いっばんに女性ほど容姿へのプレッシャーが強いと考えられている(Wolf 1991)が、先行研究と同様に、男性ほど容姿の効果が大きかった。家族形成における男女差については、佐藤他編(2010)が詳しい。

#### 4.3 リサーチ・クエスチョンへの回答

以上から、リサーチ・クエスチョンにたいしてつぎの回答を与えることができよう。

**リサーチ・クエスチョンへの回答：人びとの容姿は、ライフチャンスをとおして、キャリア形成、家族形成、心理を促進させることがある。この影響は、おおむね男性のほうが大きい。**

このように、容姿はライフチャンスを提供したり制限したりするため、社会的不平等の一要因であるといえるだろう。この点が、これまでじゅうぶんに着目されてこなかった。この結果は、同一のデータで容姿のさまざまな効果を分析することで、はじめてえられた。

たしかに容姿の程度は、教育や職業にくらべると、本人の努力が反映されにくいかもしれない。

しかし、もし現実に容姿が格差を生みだしているのなら、求められているのはまず実態を把握し、そのうえでどのような支援が可能なのかを明らかにすることだろう。

では、なぜ男性のほうが容姿の影響が大きいのだろうか。女性は容姿をめぐる競争がはげしいため、均等に美容資本に投資する。そのため、結果的に回収での差が少なくなり、(男性と比較すると)平等となっているようである。これにたいし、男性はかならずしも容姿を求められないため、美容資本への投資が不均等で、結果的に容姿による不平等が生まれるのかもしれない。

いわば、日本のプロサッカーリーグが男性のJリーグと女性のなでしこリーグにわかれているように、容姿でも男性リーグと女性リーグに分割されている可能性がある。そうだとすれば、我われは男女に分かれてそれぞれのリーグ内で、容姿という人的資本(美容資本)を活用しているのかもしれない。そのとき、女性のほうが競争的でハイレベルなため、帰結への影響がむしろ少ないようである。

なお、容姿が家族形成に役立つことが分かった。このことから、容姿という人的資本が恋人や配偶者といった人間関係とのソーシャル・キャピタル(社会関係資本)へと、転換されたと解釈することもできるだろう(ソーシャル・キャピタル概念についてはLin 2001、三隅 2013 参照)。

#### 4.4 今後の課題

第一に、この論文では、容姿を主観的評価で測定した。これが他者からの評価と一致しているかを、実験などで確認する必要があるだろう。なお、20歳時容姿の影響を、現在の自信で統制しても、ほとんど結果に変化がなかった。したがって、主観的容姿評価は、自信をどれくらいもっているかとは独立に、キャリア形成や家族形成を促進することが分かっている。

第二に、この論文では男女の違いを分析した。もしかしたら、コーホートや教育や職業によっても、メカニズムが異なるかもしれない。さらに、それらが性別と交互作用をもつこともあるだろう。

#### 【謝辞】

この研究は、成蹊大学研究助成「少子化社会における結婚格差の調査研究」(2012年度、共同研究、研究代表：小林盾)の成果の一部です。日本社会学会大会にて小林・谷本(2015a)(2015b)として報告されました。

執筆にあたり、大崎裕子、川端健嗣、片瀬一男、神林博史、佐藤嘉倫、七條達弘、永吉希久子、浜田宏、山田昌弘、渡邊大輔各氏から有益なコメントをいただきました。記して感謝します。

#### 【文献】

- Becker, Gary S., 1964, *Human Capital: A Theoretical and Empirical Analysis, with Special Reference to Education*, National Bureau of Economic Research. 佐野陽子訳『人的資本：教育を中心とした理論的・経験的分析』東洋経済新報社、1976。
- Campbell, Angus, Philip E. Converse, and Willard L. Rodgers, 1971, *Quality of American Life Questionnaire*, Inter-university Consortium for Political and Social Research 3508.
- Hamermesh, Daniel S., 2011, *Beauty Pays: Why Attractive People Are More Successful*, Princeton University

- Press. 望月衛訳『美貌格差：生まれつき不平等の経済学』東洋経済新報社、2015.
- Hamermesh, Daniel S. and Jeff E. Biddle, 1994, "Beauty and the Labor Market," *American Economic Review* 84(5) : 1174-1194.
- Hatfield, Elaine and Sprecher, Susan, 1986, *Mirror, Mirror... : The Importance of Looks in Everyday Life*, Albany, NY: State University of New York Press,
- 吉川徹、2014、『現代日本の「社会の心」：計量社会意識論』有斐閣。
- 小林盾、2012、「食べ物に貴賤はあるか：社会規範と社会調査」米村千代・数土直紀編『社会学を問う：規範・理論・実証の緊張関係』勁草書房。
- 小林盾、2014、「結婚とソーシャル・キャピタル：何人と恋愛すれば結婚できるのか」辻竜平・佐藤嘉倫編『ソーシャル・キャピタルと格差社会』東京大学出版会。
- 小林盾・川端健嗣編、2016、『成蹊大学社会調査演習 2015 年度報告書：第 7 回暮らしについての西東京市民調査』。
- 小林盾、カローラ・ホメリヒ、見田朱子、2015、「なぜ幸福と満足は一致しないのか：社会意識への合理的選択アプローチ」『成蹊大学文学部紀要』50 : 87-99。
- 小林盾・谷本奈穂、2015a、「ルックスを測定する：調査と実験による計量アプローチ」『第 59 回数理社会学会大会研究報告要旨集』。
- 小林盾・谷本奈穂、2015b、「ルックスと社会階層：実験と調査で計量分析する」『第 88 回日本社会学会大会報告要旨集』。
- Lin, Nan, 2001, *Social Capital*, Cambridge University Press. 筒井淳也他訳『ソーシャル・キャピタル：社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房、2008。
- 三隅一人、2013、『社会関係資本：理論統合の挑戦』ミネルヴァ書房。
- 森川友義、2007、『なぜ、その人に惹かれてしまうのか？：ヒトとしての恋愛学入門』ディスカヴァー・トゥエンティワン。
- 内閣府、2011、『結婚・家族形成に関する調査報告書』。
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編、2010、『日本の幸福度：格差・労働・家族』日本評論社。
- 谷本奈穂、2008a、『恋愛の社会学：「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社。
- 谷本奈穂、2008b、『美容整形と化粧の社会学：プラスチックな身体』新曜社。
- 谷本奈穂、2015、「美容：美容整形・美容医療に格差はあるのか」小林盾・山田昌弘編『ライフスタイルとライフコース：データで読む現代社会』新曜社。
- 佐藤博樹・永井暁子・三輪哲編。2010。『結婚の壁：非婚・晩婚の構造』勁草書房。
- 竹ノ下弘久、2013、『仕事と不平等の社会学』弘文堂。
- Umberson, Debra and Michael Hughes, 1987, "The Impact of Physical Attractiveness on Achievement and Psychological Well-Being," *Social Psychology Quarterly* 50(3) : 227-36.
- Wolf, Naomi, 1991, *The Beauty Myth: How Images of Beauty Are Used Against Women*, New York: Anchor.
- 山田昌弘・白河桃子、2008、『「婚活」時代』ディスカヴァー・トゥエンティワン。